嫌フ、大小交リタルヲ好メリ、砂些モナク色ノ黄バシリタルヲ吉トス、微塵モ霰モ、爐ニ入ル時水ニテ能濕リヲ可掛、燥時ハ落ツカズシテホコリ上ル也、世寒スル時ハ、灰少ク火多ク、暖ナル時ハ灰多ク火少キ也、風爐ニ可擧前ニハ、別シテ灰多ク成ベシ、土鍋ニ入ル灰ハ、猶以能濕シテ吉、燥キタルハ炭衣ヲ消ニ堀立テ惡シ、總ジテ爐中ノ法、大概ヲ雷盆ノ内ノ如クスベシ、隅ヲ欠事、別ノ子細ナシ、見物ノ爲也、大釜ノ時ハ少ク、小釜ノ時ハ大ク欠ナリ、四方釜ノ時丸クスル事モアリ、風爐ノ灰、極テ輕キヲ用、其法前ノ方ニテ、右低ク向右高クシ、前五德ノ脇右短ク左長ク、前ノ方兩間ハ杓子次第也、口傳、

〔茶道筌蹄一〕點茶前

風爐置付樣幷灰仕樣略○中　灰をなすには、先風呂を眞にて置き、五德も眞直に居へて、風呂を少し客付へにじらして灰をなす也、客付の灰は、見込の方の五德の爪の外づらを廻す、見付の方の爪は灰眞になす也、琉球風呂、臺子風呂は、押切灰、二文字、雲龍風呂、其餘眞風呂、又はふところ挾きは二文字蒔灰也、鐵風呂は押切かき上ゲなり、

風呂灰の名所　風呂に向ひて、左りは見付、右は見込、向は山、大風呂は山二ッ、五德の爪を挾む、小風呂は山一ッ、五德の向、向爪を眞に取る、山と見込との間は切落し、

大風呂といふは、大尻張、大阿彌陀堂の類也、

〔喫茶指掌編三〕豐臣殿下吉○秀　小田原御陣拂の時、古田織部と利休、由井が濱を馬上にて同伴し登りける、其濱邊をみて利休云、此鹽濱の景色如何、茶に付て思し召有にやと問、織部なしと云、利休云、此濱邊の浪うちよせたる風情を、風爐の内の灰にうたせ度と云ば、織部存外の思ひ付なれば大に感稱しぬ、○略中

宗旦の嫡子宗拙、故有て勘當を蒙、其頃大德寺大源庵天室和尚笑止に思ひ、我寺に招寄養しが、或